受験番号						
氏名						

二〇一八年度　教育学部学士入試　問題用紙

「小論文」教育学専修

次の文章の主旨をふまえたうえで、「凡庸であること」の積極的意義について、あなたの考えを五〇〇字以上六〇〇字以内で論じなさい。

「個性」の問題は、教育の世界でさかんに論じられるが、その論じられ方には二つの問題点があると思われる。

一つは、人間が「個性」をもつことが無条件によいこととされ、「個性」を育てる教育こそが真の教育であるという考えの妥当性がまったく疑われていないということである。教育論で個性が問題となる時には、現在の教育が豊かな個性を育てないという批判的立場からと相場が決まっている。立脚点と結論とがあらかじめ一方向的に定められているのだ。

もう一つは、当の主題が、まさに教育論の範囲でしか議論されないということである。「個性」をもつということがどういうことを意味するのかということが、もっと広い人間論的・文明論的視野から検討されることがあまりない。この論議は、年少者を対象とした大人の実践的関心によって強く色づけられており、そのために、個性とは何かという原理的な追究がおろそかにされてきたのである。

近代社会が成立している地域ではどこでも、「個」としての人間の価値が強調されている。個人主義精神、基本的人権、個の尊厳など、いろいろな表現のちがいはあっても、いおうとしていることはほぼ同じである。人間をマスとしてとらえるとらえ方をできるかぎり排除して、一人ひとりのかけがえのない生存というところに極力まなざしを集中させようとする。この強い傾向は、裏を返せば、近代社会というものが、一方では個人の価値を法秩序や道徳意識の確固たる構成原理として打ち出しながら、他方では個人をのみ込んでしまうような集合的な力学にたえずさらされているきわめて流動的で不安定な社会であるということを物語っている。

逆のいい方をするなら、「個の尊厳」という原理を社会秩序の基軸にする以外に、いかなる特定の共同性の原理（たとえば特定の「神」をいただく集団や特定の家柄にもとづく「王権」）にも特権的・支配的な地位をあたえることができないのが、近代社会の原則である（むろんこの原則は原則通りに貫かれているとは限らず、実際には、それぞれの社会が伝統的に受け継いできた「神」や「王権」を形式的な中心軸に据えることで、その社会の秩序に対する心理的な補強物の役割を背負わせてきたのであるが）。個人は、したがって、自分の存在のよりどころを自分以外の何かに全面的にゆだねることができず、最終的には自分自身にアイデンティティを求めざるをえない。彼または彼女はいわば自ら抽象的な「個」として「社会」と呼ばれる抽象的なものと向き合うことになる。

もちろん、現実に生活していく時、人は家族とか企業とか国家とかいった具体的な共同性から完全には身をもぎ離せない存在として生きるほかはない。そしてまた同時に、そうした共同性の一員であることは、個人が裸で社会に向き合うことの危険からの実質的な防護になっていることもたしかである。

しかしそれにもかかわらず、近代人としての私たちは、自分の存在の抽象性、無帰属性にどこかで気づいており、自分を何々家の一員としてとか日本国家の一員としてとかいったいい方で全面的には規定づけることのできないものを感じている。それは、たとえば、現代の親たちに、子どもをどのような大人にしていくべきかという「養育の理念」語らせてみると一番よくわかる。かれらの大多数は、おそらく「立派な社会人として」といった抽象的ないい方をするほかないだろう。かれらが「立派な日本国民として」とか「すぐれた何々業者として」とか「慈愛深い母親として」などという理念を頑固に前面に押し出すとはとうてい考えられないのである。

以上は、私たちが一般性としての「個」の原理を重要視せざるをえない社会構造上の必然性を語ろうとしたものである。しかし近代はそれにとどまらず、同時に「個性的であること」を価値あることとして人々に求めてくる。だが、近代人にとって「個」の原理こそが最後に残されたぎりぎりのよりどころであるという事実と、「個性」をすばらしいものとしてことさら称揚しようとする精神とは、おのずから別である。

個であることのかけがえのなさと、個性的であることの価値性とは、もともと重なり合わない。個性的であるとは、凡庸さのなかにあってひときわ目立つということであるから、それを人間としてより価値の高いことであると認め、誰もが実現すべき目標と考えるなら、その指向性自体は、凡庸であることの否定を含んでいる。

受験番号						
氏名						

二〇一八年度　教育学部学士入試　問題用紙

「小論文」教育学専修

他方、個であることのかけがえのなさとは、すべて人間は一個の存在として等しく尊重されるという意味であり、人間の値打ちはそのかぎりでは、凡庸であるか個性的であるかにかかわらないということである。「個であること」の尊重とは、別にその存在が際立った個性を示さなくても、一人の人間であるかぎり、他の「個性ある」存在と等価なかたちでその存在理由を認めましょうということである。

このように、個についての二つの価値原理は、究極的には和解不可能な矛盾を含んでいる。これはちょうど、近代の二大理念としての「平等」と「自由」とがつきつめると矛盾してしまうのに対応している（平等の強制的な徹底は、個人の自由を大きく束縛する）。

そこで私たちはふつう、凡庸であろうとなかろうととりあえずすべての人々の個としての生存権利を等しく保証し、そのうえで、それぞれの個人が示す個性の品定めをするという折衷的な人間判断の態度をとっている。「個であること」はいわば、「個性的であること」が人々の間に差異として出現するための抽象的な前提であり、個性が自由に伸びるためのスタートラインというわけである。

多くの人は、個性の持ち主にあこがれて、できれば見習いたいものだと思いながら、実は一方で「人並み」であることをひそかに求めてもいる。「ひと」からはずれていたり、おくれていたりすることはかれらを極度に不安にする。「同じ」思いを抱いていたことを発見することは大きな安心をあたえるはずであるから、「同じ」思いの通ずる仲間が見つかると、すぐにでも群れようとする。そういう人間のあり方は、ほとんど本能的なものとして、誰もが抱えている傾向であるといってよい。

にもかかわらず凡庸さは、表向きなぜこれほど忌み嫌われるのか。それは、おそらく、人間というものの大多数が凡庸な生を生きるほかなく、自分の未来もまたその限界のなかにあることをうすうす知っているのだが、そのことをそう決めつけられることは、自分の生を希望のない確定的なイメージに塗り込めてしまうことであり、それは個としての価値を否定されてしまうことにつながると感じられるからである。

生きる意欲が現にあるのに、おまえの未来はこのとおり当たり前のものでしかないと規定されることは、未来に向かうものとしてある「生の意欲」の本質的条件を根こそぎにしてしまう。自らが有限な存在であることを大筋ではわきまえつつ、しかもその範囲内に未知の部分を必ずいくらかは残しておく、そこに自らが個であることの確証をかろうじて求めようとするのだ。

おそらく近代以前には、凡庸であると認めることは、同時に何らかの身分や階級の一員として自らの存在を同定することを意味していた。なにものでもない凡庸な大衆、などというものはそんなに存在しなかったのである。

しかし、近代は、人間の社会的属性をあいまいにさせ、無名性の海のなかに個人を放り出す。属性によって秩序づけられない「一般大衆」とか「群衆」とかいう名の人間様態が大量に出現したのである。そこにおいては、凡庸であることは、そのまま「顔や名前をもたない存在」という規定を受け取る可能性につながってしまう。

したがって、意地の悪いいい方になるが、個性をすばらしいものとして称揚しようとする傾向は、凡庸さからの逃走を意味しており、凡庸であることに安住できなくなった近代人たちの強い不安をあらわしている。当たり前であると知ることが生きる自信につながらず、かえって存在の根拠を喪失してしまうように感じさせられている。人々はたえず、自分自身に対して、個性という呪文をかけていないといたたまれないのである。

このように近代人は、「人と同じであろうとする」本能的な傾向と、「人とはちがった存在であろうとする」強迫的な傾向とに引き裂かれているのである。

小浜逸郎「個性という強迫」による（一部省略）

※上記試験問題は原文が一部省略されております。
（この旨、著作権者からの要請により追記しております。）